

本格的権力闘争としての 第2の10・8の創出を！

文学部学生会企画

講演・映画会

中執：経営・政経学部

各学生会との合同企画

(P. 22 参照)

65年、米国の北爆開始を直接的契機として全面的戦争状態に入ったベトナム革命戦争の勝利的展開は第2次大戦直後の階級闘争の高揚以降10数年に渡って基本的には「沈黙」し続けてきた先進帝国主義各国に新たな階級闘争のうねりを呼び起した。(国際的な広がりをもって闘われたベトナム反戦闘争がそれである。)この闘いは日本にあっては「プロレタリア国際主義」の復権と、プロレタリア革命の本来の暴力性としての、復活としての「組織された暴力」の端緒的登場としてあった。67年10・8羽田闘争以降、「コン棒とヘルメット」に象徴的に表現される実力闘争として、二度の羽田→佐世保→王子→成田→10・21防衛庁→新宿→御堂筋へと連続的に展開され、その闘いの質を深化し、量を拡大していった。しかし、我々の実力闘争が権力の従来の治安体制を根底的に揺り動かしたが故に、(逆に68年)10・21闘争での「騒乱罪」、69年4・28闘争での「破防法」の適用に如実に示される権力の「密集した反革命」を引き出し、この「密集した反革命」の壁を、それを引き出した我々自身が突破しえず、その事によって従来の実力闘争はその限界点に達した。

60年代後半の我々の実力闘争は、その実現しようとした目的性はともかくとして、現実的には「大衆武装カンパニア闘争」としてしか展開できなかった。即ち全面的政治バクロを主眼として、闘いを暴力的形態をもって展開し、従って例え一極的において機動隊に軍事的に敗北したとしても、その闘いによって日帝の動向＝東南アジアに対する侵略反革命、国内の帝国主義的社会再編をバクロし、この事を媒介として市民社会に亀裂を拡大し、分解した大衆を革命的左翼に組織化することによって、政治的には勝利するという内容をもった、「大衆武装カンパニア闘争」であった。従って、又「暴力的形態」と云っても、その暴力の質は、「大衆武装カンパニア闘争」の内容からも明らか如く、政治バクロの為の暴力でしかなかった。

以上において、その内容を明らかにしてきた「大衆武装カンパニア闘争」の有していたその有効性＝革命性の喪失、《死》は、69年4・28闘争、70年秋の安保決戦の「血の敗北」としてすでに階級闘争の実践において実証済みであり、今や我々の「共通の認識」となっている。

しかし、ここで重要なのは「大衆武装カンパニア闘争」の有効性＝革命性の喪失、《死》を只、

確認する事ではなく何故有効性を喪失してしまったのかと云う間に答える事である。確かに前述した如く、直接的には我々自身が引き出した権力の

「密集した反革命」の登場によって「大衆武装カンパニア闘争」は圧殺され、従来有していた有効性＝革命性を喪失したのであるが、しかしこれだけでは外在的・一面的であり、決定的に不十分である。この外在的・一面的に答えてしまうならば、

「大衆武装カンパニア闘争」を圧殺しているのは権力の「密集した反革命」であり、従って戦術的左傾化を計り、「密集した反革命」を突破するならば、「大衆武装カンパニア闘争」は甦り、その有効性＝革命性も復活し得ると思われ、戦術的突破を夢想するかのドンキホーテ赤軍派的傾向に陥ってしまうのである。我々にとって重要な事は、権力による圧殺を具体的現実として確認すると同時に、我々の側からする「大衆武装カンパニア闘争」に対する《死》の宣告である。

「権力闘争—武装蜂起」に向けて、階級闘争の質的変換を確実に我々の闘いによって対象化していくべき時代＝「権力闘争の時代」として70年代階級闘争を措定する事によって、我々はもはや、「大衆武装カンパニア闘争」がその有効性＝革命性をもち得ないということ、我々の側から宣告していかなければならない。即ち、70年代を権力闘争の質をもって闘うという事は、本格的権力闘争(武装蜂起)に向け、行為的現在から、例え、それが極めて端緒的であったとしても、自らの権力実体の創出を物質化していくのでなければならないのである。

現在の混迷停滞している反帝統一戦線の状況のみをみる時、我々は全共闘—反戦の「大衆武装カンパニア闘争」としての闘いの根底的な総括をなしきり、70年代階級闘争が、明確に権力闘争としてあり、我々は70年代権力闘争を担っていくものとして地区共闘—ソビエト型組織としてその内容を提出していかなければならないし、そのような地区共闘の質で反帝統一戦線の再編をなしていかなければならない。

我々が、再び第二の10・8を創出し、しかもそれは明確に権力闘争の質としての10・8を創出するべき我々の闘いの準備をなしていかなければならない。